

じやうにして下さるのなら、私は、もう贅澤を止めて、親鸞さんの沙門になして貰ひたい程だ！ だからなあ、私のいふことを聞いてくれ。私は何ものかに心が迫られて、じつとしてをれんのだ。親鸞さんに二百人の囚徒をお任せしようか？ どうだ？」

すると、弟の春時は、「兄さんの仰せなら、私は何も反対はいたしません。ぢや、親鸞さんにお任せしてよろしゆう御さいます！」といふた。

「私を信じなくても、彌陀如來様の功德を信じて、囚徒を如來に任せて下さい」。

「なあ、春時、よろしいか？ 私は親鸞さんの相談をふり切るわけには行かないが……」國時がさういふた。春時が點頭うなづいて居るのを見ると、國時はまた「よろしい！ お任せしませう然しな、私も悪養子わるやうしをやつたつきり、いゝ氣でそしらぬ振はしてをれんのだ。私に何とか御用命があつたらいいして下さい」と親鸞にいふた。

「有りがたい、有りがたい！ 然しな、私は折角の養子を怠惰者なまけものにしちや、相濟まないもので、一人一人が力を合せて働けば、自分一人の食ひ物だけ位稼ぎ出さない事はあるまい。乾干しにならん限り、あれどもも、苦勞の味を感謝するやうになつてくれなければ、やつぱり米の

掃きだめになりますで……」と親鸞は答へた。かうして親鸞は、國時等と手をとり合ひ、あとは皆で念佛をとへた。

九

筑波山おろし吹く風は身を切るやうになつたが、二百名の放免囚徒と二三十名あまりの貧民は、親鸞の弟子達の指揮の下に、汗水垂らして耕地整理に従事してゐた。

谷川に臨ふた丘の麓には堀立小屋が建て並べられ、その前面の廣場には、炊事場の煙が立つて居る。もう今日が、今年の仕事の仕收めで、元日と二日は骨休めといふことになつてゐた。

耕地整理早々、もう麥を蒔いた田は三町歩程あつた。この勢で行けば、來年六月の稻植え迄には二十町歩の田地が整理されるといふことになつてゐた。そこら邊りの山林七町歩は、眞壁の城主が放免囚のために寄附してゐるのであつた。

遙か下の方なる勞作中の人ごみの中から、今一人の爺が牛のやうな體軀をのつそり／＼動か

して丘の麓へとやつて来る。見れば顔には髭が茫々と生え、亂髪の下からは、威嚴に慈悲に光る双眼が靜かに輝いて居る。

丘の木かげからは、素樸な着物を纏ふた旅姿の奇麗な婦人が若かい美しい娘と二人出て来て丘の下を見て居る。丘の麓にやつて来た爺が、ニツコリすると、二人の女はそつちに飛んで行つて、なり下るやうに喜ぶ。彼等は親鸞夫人と昌姫である。

玉日は懐からふくさを出して、「京都の聖覺法師から突然おたよりが御さいましたもので持つてまいりました」といふ。

親鸞は、ふくさを解いて、大きな封筒に收められた手紙を開いた。斯う書いてある。「この度大悲の願相ならせられ、大行の御働き着々御進捗と承り、誠に感嘆の至りに堪えず、早速病床に、慈圓僧正を訪ひ、事詳かに御話申上候處、僧正感窮つて落涙滂沱御喜び斜めならず、僧正の御所持品一切をあげて、悲願大行のため貴下に御寄附下され候由仰せつけ有之、小生代つて僧正の慈悲に感謝涕泣仕候。即日小生僧正の仰せを受け、御持品少々取調べ候處、金三千文を得候へば、即刻便を得て御送金申上べきの處、僧正の御容體俄かによろしからず二日を置い

て念佛感謝の裡に永眠遊ばされ候。御臨終の有様など委細御報知申上べきに候が、聖葬の日も明後日と相定まり候こと故、右御報知をかね御在世の意それ以前御取つき致し度、早馬の便を以て、こゝに金三千文慈圓僧正に代り拜送仕候敬具」

巖のやうな鸞親は両手に書簡を擴げたまゝ眼が霞んでしまつて、見るまに涙がバラバラ落ちて来た。親鸞は繰りかへし書簡を丁寧におし戴くと、大きな手の甲で涙を一度おゝ拭ひ、「あゝ！ あゝ！」と溜息をつゞけ、「慈圓僧正がおなくなり遊ばされたのだ！」といふたまゝ手を拱いで眼を閉ぢた。

「まあ、さようで御さいましたか？」夫の顔を見てゐた玉日も涙ぐんでしまつた。昌姫も袂で顔を掩ふた。

「僧正が、亡くなられる二日前、私どものため金三千文を御寄附下すつたのだ！」と親鸞がいへば、玉日は小屋の中に立歸つて、囊に納められた現金をとり出して来て卷出した。

親鸞はそれを受取ると、またおしいたゞいた。そして、「さあ、小屋の中で一緒に感謝しよう」といつて、小屋の方へと行つた。

半歳の勞役が殆んど終りに近づいた頃には、去年の冬に種子を蒔いた麥が三町歩に亙つて收穫される時分になつて居た。泥水の中に半ば埋もれて居た沼地は、耕作に適するやうになり、荒野が整理されて、もう殆んど二十町歩の田地が出来上るといふ頃には、丘の麓に沿ふて、木造りの共同農家が建築されてゐた。

苗おろしも、もう直きだといふ頃だつた。眞岡の城主、大内國春、その臣久下田秀方、小栗尙家、それから眞壁の城主春時、下總國相馬の郡司權太夫高貞、平塚の郡司源重遠、笠間の城主權太郎基員たちが袂をつらねて、親鸞の大檀那となり、大内庄に精舎を建立して、感化を後世に垂れたいといふことになつた。各檀那からは、臣下や若者たちが總出でやつて來るし、それにまた常陸、下野、下總、陸奥に擴がつた信徒たちが、雲のやうに集まつて、材木を運ぶやら、砂石を運ぶやら……直ちに建築に着手された。

その時分、國時は、もう昨日の風流贅澤な生活を悔改めて、宮村の西川近くに、草庵を結ん

で、近邑の教化につとめまた、親鸞を招いたり、親鸞を訪ふたりして居た。

けれども二十町歩の水田に、梅雨が降りそゞいで、苗植えが初まつた頃、二百名の囚徒たちの間には不安な念と、反抗の情が起つて來た。

「俺等を死蟹になるまで働かせて置いて、苗植えがしまへたら、また獄屋にぶちこむのだからか？」と或る者はいふてゐた。

「親鸞爺は、蟲がよすぎる。俺等を使ひ廻して、大地主になりすまし、どこまでも俺等を奴隸にこき使はうといふんだらう！」或る者は斯ういふてゐた。

夕方から雨が止んで、瑞々しく金星が滴り、夕焼の美しい日であつた。その日は、もうあと一日で、植つけも大抵片づくといふ日で、囚徒たちには猶更憂悶の情が湧いてゐた。親鸞はその晩、どうしても寝つかれなかつた。眞夜中過ぎていよ／＼寝苦しくなつた彼は、そつと堀立小屋を出ると、星が美しくまたゝいてゐた。唯圓も眠られなかつたと見え、ゴロリと起き出て小屋を出た。

「どこへいらつしやいますか？」と唯圓は尋ねた。

「私は珍らしゆう今夜は眠むられないでね、こんな晩には何ごとかあるような気がするよ」と鸞親は答へた。

「私も寝苦しゆうございまして、まだまんぢりとも致しませぬ……あゝ星が綺麗で御座いますね……」

「私はちつと歩るいて来よう！」

「私もお供してよろしゆう御座いませうか？」

「あゝお出で！」

二人は蹠で、冷々とする夜氣にうたれながら、林の中から下の方へとおりて行つた。

「いよゝゝ一兩日で、御願が成就いたしますね。ほんとに愉快な半年で御座いました」唯圓は斯ういふた。

「あゝ、ほんとに感謝に堪えない！ 然しな、力を盡せば盡す程、悲願の大海には限りがない」

「けれども、親鸞様の御信仰に浴しなければ、こんな事は、とても出来やしません！」

「いや、さうぢやない。彌陀佛の本願を憶念すれば、誰だつて自然に必定に入るものだよ。悲願は、世の智者學者には愚かなものだが、自分たち救はれる者には、大行の所因であり、無碍の一道なんだ！」

「親鸞様！ 私はこの六ヶ月の間に大なるものを學びました！」

「うむ！ 人は考へても何も學べないものだが、働くと、自然法爾で、おのづから斯あるべき事を悟らせるものでね！」

「私は、澤山の大檀那が出来ましたことにも驚かされるので御さいますが、囚徒たちの多くが受けました教化の力に感動させられます！」

「けれどもね、悪人や囚人を教化することは易いことだよ！ それでも、私には、まだどうも囚人たちの間に純でない、おそろしい叛逆の塊があるやうに思はれる。それは、彼等の様子で解るのだ！ 心に徹底しないで、植えられた苗には、決して祝福があるものでないのだよ！ 二百人の囚徒の中、一人でも不徹底な叛逆の情に惑はされて居る者があつたら、それは怖ろしい破滅の原因なんだよ！ どうだ？ お前には、不平の囚徒があらうとは思へないのか？」

「どう致しまして……これ程恩恵を受けましたのに、不平をいふやうな者がありましたら、八萬地獄に落ちます。若しさういふ者がありましたら、眞理の徹底のため死刑にしたらよいでせう！」

「さあ、その一人だ。その一人が二百人の中をつたら、その一人こそ大切なのだよ。たとひ、吾佛を得んに、國に地獄、餓鬼、畜生あらば正覺を取らじとの法藏比丘の本願は、どこまでも遂行されなくちやならんのだ。大檀那が出来、澤山の布施を集めることは易いが、一人残らず囚人が究竟するところがなければ、誓つて正覺とはいはれないものだ。二百人の中の只一人の叛逆者が其のまゝに棄てられなくてはならんのなら、私どもの今度の仕事は、全く偽善になり終らなくちやならぬ！」

「けれども善信様、光は陰を供なひます。救ひのあるところには、救はれない地獄も在るのぢやないでせうか？」

「お前は救はれない地獄が在ると思ふのか？」

「在ると思ひます！ 私は憎くてならぬ人間を一人持つてゐます。私は、そいつを殺してや

りたい程憎くて今夜も眠れませんでした」

「赦してやれないのか？」

「赦されませぬ。」

「赦さないで、どうなるのか？」

「親鸞様！ 法藏菩薩の不行は、一面から考へますと、絶對的に赦さない誓願ではないでせうか？ 地獄、餓鬼、畜生を一つ残さず赦して置けない不死の焔ではないでせうか？」

「あゝ然し、お前の憎い地上の鬼といふのは、たつた一匹か？」

「さようで御座います！」

「お前にね、全世界の悪人を根こそぎ殺せるだけの力があるならその一人をも殺してもよからう。然し一人の悪人を殺したからとて、どうして地獄の退治が出来るものか？ 地獄を亡ぼす力は、究竟の力だ。絶對の力だ！ お前は究竟の願土に立たないで、相對の迷ひに苦しんでるのではないか？」

「けれども、親鸞様、何故だか私の胸には、墓石のやうなものが横たはつて、私の靈魂は鈍

重な賤しい思ひに窒息しさうで御座います。この墓石を跳ねとばすため、私は赦せない一人を殺したら、究竟の願土に慕進して行けさうな気がします！」

「ぢや誰を殺すのだ？」

「囚人の惣五郎を殺したいので御座います。」

「どうして惣五郎を、そんなに憎いと思ふのかい？」

「あいつは眞面目になれない人間です。三毒五濁と、微毒痲病に喰はれて、魂が鬼の巢になつてゐるのです。あいつは握り飯一つのためには、友達を欺き、臥しどの欲しさには、隣の者をも刺し殺す男です。何か食ひ物をあてがはれても、狐のやうな眼で、隣の者の様子を伺ひ、嬉しいことがあると、感謝することは忘れて、ほざけ廻り、私が血を絞る思ひして法を説きますと、あとで赤い舌を出し、留守の友達の食物を盗み食ひしては、飢えたその友の後姿を見て舌を出し、氣に喰はなければ、正しい者を散々に誹謗し、物の欲しさには、ペコペコと何人にも誂らひ、それはく見るから憎らしい奴で御座います。あんな奴を入れて置くことは、教への跪づきになるので御座います。分配が一分一厘でも自分に不利だと思つたら、親鸞様の頸で

も狙ふ奴で御座います。臆病野卑な癖に、貪りと狂的發作のためには、生命をも忘れて、突かゝつて行く奴で御座いまして、參詣人の人たちからは物品や食べ物をまくり上げて、親鸞様の弟子だといひふらし、島の賛成を盗み出しては、山向ふに女をつくつて遊びに行き、二日も経つて、平然ととぼけ面して戻つて来る奴で御座います」唯圓が斯ういふと、親鸞は痛ましげに手を拱ぬいで考へこんだ。

「惣五郎は、三番の小屋にゐる若かい男だね」と親鸞は突如頭をあげた。

「さよう御座います」

「困つた奴だな。お前は、さぞ憎らしからう！　が、私が殺せといつたら殺す積りか？」

「はい！」と唯圓は答へて、腕をさすつた。

「然しな、あれは俺が信心の血脈なもの。あれを殺すのなら、この親鸞を殺してはどうだな？」

「……………」

「どうだ！　遠慮はいらないが……………」

「……………」二三度口をどもらした唯圓は「わたくしは……………穴の中に入りたくなくなりました！」といふて、兩手に頭を埋めた。

親鸞は大きな聲で笑ひ出した。そして、「なあ、いゝからこの親爺おやぢに任せて置いてくれ！ 殺してしまへば、もう憎にくめもしない。死んだ者を憎むのは卑怯だ！ 憎むなら、あれを生して置かんとならん。よし殺したつて、それで憎しみは消えるものでない。若し殺してしまつたら、お前は永劫の憎しみを抱いてをらんとならなくなる。さうなつたら堪らないよ！ 憎らしいと思ふなら、憎らしい程生かしてやつて見れ……………きつと憎み甲斐が出来て来る……………まあいゝ、私は蓮信からも、そんな話をきいたのだ。私にもちやんと氣がついてゐた。然し、あれ一人ぢやない。六十九人の正しい者の中に一の鬼は住めないものだよ！ 三番の小屋に居る五人は皆同じ徒黨なんだ。鬼は鬼だけ集まつて住はねばならんやうに出来てるものでね……………面白いものだよ。私も實は、あれ達のことを思ふて、どうしても眠むられなかつたんだ。ひよつとね。今晚方になつて、あれ達が盗みものをして逃げ出すやうな氣がしてね！」

二人がこんな話をして、闇の底を靜かに歩いて居ると、人喰池ひとくひ池の畔に出た。

「行つて見ようか？」親鸞は斯ういつて、靜々と島の方へ渡つて行つた。と、親鸞は立どまつて、小聲こゑ「人がゐるやうだよ！ 見て来よう！」とさゝやいた。二人が忍び足して行つて見ると、方丈の御堂みだうの中に、こゝ／＼話し聲がきこえる。そこには燈火が影くらく燈ともしされて、誰か二三人たしかにゐるやうだ。唯圓は壁の節穴から覗いて見て、そつと立ちのき親鸞の耳に口をよせて、「惣五郎と、金七が酒を飲んで居ます。參詣人が供へて行きました肴を得意然と平たいらげてゐるのです」といふた。

「どれ！」親鸞も、様子を覗つた。

そして二人はまた躑音立しむねたててす島かも引戻つて池畔まで來た。「酔つばらつて、逃げ出すかも知れません。私はこゝに番をしてなませう！」唯圓は斯ういふて、そこに腰をおろした。

「お神酒みきでもあげて呉れる人がゐるのかね？」と親鸞は尋ねた。

「いゝえ、酒は私どもの禁物で御さいます。釋尊も酒を禁ぜられました！」

「ぢや、どうして酒を手に入れたんだらう？」

「參詣人から布施をせびつたり、島の贊成を盗んだりして、町から買つて來たのに定きまつてゐる

るんです！」

もう間もなく夜が白んだが、唯圓は林の中から、惡漢二人の様子を遙かに伺つてゐた。

— 11 —

十二町歩の新らしい水田に、すっかり苗植えがしまへ、新築の寺、専修阿彌陀寺の建立も棟上げが出来た。半ケ年の激烈な労働を終へた二百人の囚徒、また同勞の村民、遠くから來た信者たちは、梅雨の晴れた一日、感謝の法會を開くことになつた。

初夏の烈日を遮ぎる斯緑の下に、わしろ 蓆が敷き擴げられて、會衆は三百人に及び、國時、春時、國春も列席した。十一名の弟子たちは、熱心に無量壽經をとなへて居る。一座は念佛の聲に満される。

讀經が済むと、親鸞は高座に立つたが、感激して言がものいへない。念佛の聲は潮のやうに湧き囚徒や村民の中には、地に伏して感謝の思ひに泣き出した者さへある。

「なまみだぶ、なまみだぶ」、親鸞は眞實稱名が稱へられ。そしては斯ういひ出す……。

「皆さんが、彌陀如來の功德を私どもに見せて下さつて、私は有りがたくてなりません。私のやうな愚かな者は、本願招喚のの令を受けましても、只稱名をとなへる外、何も出来ない者であります。計らずも救世の悲願に攝收なされた眞岡の城主國時様、また眞壁の城主春時様並びに皆々の御熱誠をかたじけなくすることが出来まして、二百日に互る耕地整理の仕事を無事に仕し遂とげることが出来ました。誠に何とも申されぬ有りがたさで御座います。なまみだぶ、なまみだぶ。

永い二百日の間、私は二百人の息子たちを、或る時は叱り、或る時は責め、また擲つてまことに慘虐なことをしました。けれども、彌陀救世の悲願を思へば、この位な激勞は何でもないのです。勞作中、國時様は、凡ての財産を投げすて、貧しい人と同じように小さな庵をたてられ、教化の御働きにいぞがしく、春時様も山林七町歩を賜はり、何やかと數多い私の家族どものため御心配を下され、また一々御名を擧げずとも、方々の信者、顛那たちが、それぞれ御苦心の中から渺なからぬ財寶を喜捨し、大變な骨折をして下さいましたおかげで、この仕事が無事に成功したわけで、勿論私一個の仕事でないばかりではなく、二百人の息子たちの力によ

るのでもありません。救世の悲願には障碍がなく、人力で出来ないところが、悲願によつて何ごとも成し遂げられるのであります事を憶念しますと、只々頭が下つて涙が出てまいります。親鸞は涙聲になつた。そしてまた續ける。

「二百人の囚徒が赦されて、私の息子娘になつ下さつたのも、これ全く彌陀の悲願によるので、人の徳によるものではありません。城主春時様、また國春様が快く私に息子たちを下すつた大きな御寛容の徳も、また彌陀救世の悲願によるので御座います。

二百名の者が、滿三年かゝらねばならぬ大事業が、僅か半歳で終へまして、もう己に植つけまさせていたゞきましたのも、一向、彌陀の悲願で御座いますれば、二十町歩の田地も、また七町歩の山林も、凡ての建物も、喜捨物も、みんな彌陀のもので御座います。このことをよく考へて感謝をして下さい。二百人の中、そのことが悟れた人は、今朝からもう足の踏み場もない程喜び感謝してをられるが、その事が悟れない人は、今にもまだ重むい頭を下げて、近づいた地獄をおそれてゐるのです。

悲願は、地獄を化して淨土となし、宿業を化して喜びにして下さるのだが、その大いなる御

心を悟られない者があつたら、只今から始まる新らしい生活のため、悔改めて貰ひたい。一念の閃めきには三千の諸法さへ悟り盡せるものだ、世尊は教へ下されてゐます。凡夫直入の悟りは、智者百年の考へにまさつて、彌陀の心に觸れるのです。

二十町歩の田地、これは自分達のものではなくて、彌陀のものだと信じられる人々は念佛をとなへて下さい。念佛の聲が、どうしても出て来ない人々は、前の方へ出て下さい。

この土地は親鸞のものではありません。苦しみ働いてくれました二百人達の土地でもありません。人は何一つ己がものとして許されるものを持たぬ筈です。凡てが彌陀のものですもの。私は感謝に滿され喜ばしくてならんのですが、どうしたのか、仕事が遂上げられる前までなかつた傷が、今になつて突如私の心に出来ました。丁度千丈の堤が一つの蟻の穴から毀されるやうに、喜びあふるゝ私の心には、小さな傷があつて、怖ろしくも悲願の報土を、打毀して悪魔の地獄にしようとしてゐます。まことにすみません。大きな骨折を無駄にすることがあつたら私は彌陀に相すみません。城主殿初め、もろくの信者たちにすみません。

あゝ皆さん私は二百人の者に大切な彌陀の仰せを傳へなくてはならぬ時間に迫られました

然しこの傷を醫さないでは、とても仰せを受けつくことが赦されませぬ。

二百名の中には、悲願に槍を向けてゐる者があるのです。私はその二三の人々に罪を懺悔して貰はないでは、佛陀の仰せを傳へることが出来ません。

悔ひ改むべき心が残つて居ると思ふ人々は、今壇の下まで出て下されー」底力ある親鸞の聲に、邊は森となつたかと思ふと、また切りに念佛の聲が起る。

「あゝ、念佛の聲は私の心を柔らかにいたします……然し、彌陀の心が解らない人のため私は痛らい事をいはなければならぬ。私の息子の中には、信者を欺いて布施を求め、群をはなれて酒色に遊び、事業成就の上はまた獄屋につながる宿業を嘆げいてゐる者が在るのだ。私は、自分の息子を再び牢獄に投げたくはないのだ。私の家には牢獄はないのだ……けれども二百人の中には自から牢獄をつくつて、自らをそこに投げ込み、そして人を恨み、世を恨んで居る者がある。彌陀は二十町歩の田地を托して、自由な耕作のもとに、二百人とその家族を飢餓から救つて下されようとしてをられるのに、その大悲に思ひ當らず、恩恵を恨みにして、罪に惑つてをる息子……その息子はこゝに出て来い！

救はれた人は凡て正直です。罪業を隠す者は救はれてゐないので。……私は知つてる。

凡てを知つてる。彌陀の悲願をも、城主の比類ない御恩恵をも、悪を爲す縁にして、自分で自分の地獄をつくり、恩を仇にし自ら心を荒らして居る者を知つてる。信徒の方々に布施を求めては酒を買つて、島の御堂に隠れて、昨夜まで赤い舌鼓をうつてゐた鬼！私はそれを知つてゐる。鬼には容赦が出来ない……さあ決定して此處に出で、皆様と彌陀如来にお詫びせよ」突如、群衆の中に二人の男が立つた。見れば金七と惣五郎である。親鸞の眼は炯々と光つた會衆は、息をこらして、親鸞と彼等の顔を見くらべる。

悪魔につかれたかの如く、二人の悪漢が浮足して前方に出て来ると、鼠を狙ふた猫のやうに惣五郎の腕を攫んだ親鸞は、壇の下に彼をたゞき伏せ、鐵槌のやうな拳骨をふりあげたかと思ふと身も微塵に碎けむばかり、その背中をなぐりつけた。

「ほゝ！」

「はゝ！」

三百名の人々は頸をのぼして見る。親鸞は巨大な巖のやうに巖乎と轟立して動かかない。忽ち

親鸞は雷のやうに吼えた。「彌陀の御頭を踏みつけるよりも、この親鸞を踏み殺せ！」

吼えたかと思ふと、親鸞は掌を合せて暫らく眼を閉ぢたが、今度は會衆者の前に手をついてお詫びをいふた。「みんな、私の罪のためです。私ゆえに、是等の者が彌陀の本願にも、皆様の御恩寵にも叛いたので御座います。どうぞ、皆様これらの息子どもを赦して下さい。息子の罪は親なる私が負はねばなりません！」

「菩薩様！ 勿體ないことで御座います！」

「親鸞様！ 勿體ない仰せで御座います！」

斯う叫んでは、念佛を稱ゆる群衆の中に、眞壁の春時は、佩刀を握つて出て來た。壇の下に顛えて居る惣五郎を睨みつけると、一喝、「逆賊！」と叫んで、いやといふ程蹴とばし、長い刀を引ぬいで、再び叫んだ。「血を以て汝の罪を洗へ！」

蒼白になつた惣五郎は、掌を合せて座つたまゝ、今にも消え入らむばかりぶる／＼顛えてゐる。金七も、ぶつ倒れた。

「殺して下さい！」と群衆の中から叫ぶ者があつた。

親 は一心に念佛をとなへた。國時がつかつか出て來て、「待て！ お前等は罪を悔ゆるか？」と二人の惡漢にいふた。

「悪るう御さいました……」二人とも、あとは、聲が出ないで、頭を地にたゞき埋めようとする。

一騒ぎしまへて、惣五郎等は赦され、會衆は念佛三昧に入つて、おむすびと焼肴の饗應に預り、日が暮れない内に散解した。散解の折二三十名の信徒たちは惣五郎と金七の手を握つて、「よくやつてお呉れ、な、よくやつてお呉れ！」と頼み込んだり、勵ましたりしてゐた。

一一一

専修阿彌陀寺が立派に建立された頃には、二百名の囚徒は、丘下の堀立小屋を楽しい家庭にし、彼等の中の一人が住西と號して總務を握り、皆が出で、田の草をとつたり、荒地を開墾したりして居た、秋の收穫時迄彼等の食糧は、稻田からも送られ、地方の信者や、當國の城主からも仕送られ、朝夕の念佛絶ゆる事なく、一週に二度づゝは、稻田から誰か弟子が來て、法話

を行ひ、月に一度づゝは親鸞も来て、一夜を語る事になつて居た。

二百名の囚徒は、初めて自由の生活を恵まれ、一切の土地を共有にし、恵まれる食物の屑一片をも感謝して濫りにせず、相互ひに労はり勵まし合つて、秋の收穫を待つてゐた。が、その夏の最中、眞壁の城主、春時は病を得て、此の世を去つた。囚徒たちは、會葬が終るまで交る行つて手傳ひをした。春時逝つて城を嗣いだのは、その長子春行で當時十七歳の少年だつた。

もうその年の秋中ばとなつて、稲も色づきそめた。もう收穫も近いことである。親鸞は少年城主春行を連れて、田園廻りをした。赤土混りの瘦地ではあつたが、囚徒たちが手に手を入れ、草一本も稗一本もなく、それに最初の肥料が効果を呈して、豫想外の收穫があるやうに思はれた。

田圃の間をめぐつた夕、林間には二百名の者とその家族が陣どつて、親鸞の歸りを待つて居た。房々と穂を出した稻田の畦を二人が歩るいてゐると、惣五郎が走つてお迎へに來た。

惣五郎は、親鸞と若かい城主に、うや／＼しく禮をしては暫らく合掌して、「どうぞ、夕御飯をおあがり下さいませ！」といふた。

「あゝ有りがたう！」と喜ばしげに親鸞は感謝した。春行は念佛をとなへた。二人が先に立つて、丘の方に赴くと、惣五郎は小腰をまげて後について來る。

「惣五郎どん。お前が一生懸命働いてくれたので、思つたより收穫が多かりさうだよ！」と親鸞がいふと、惣五郎は四五遍、地に額ひたいのつく程お辭儀をして、満面に喜悅の情を浮べ、

「どう致しまして……おかげ様で御座います」といふた。

「どうだな！ 獄屋も時にや慕はしくはないかね」親鸞は戯談をいふて見た。惣五郎は、またペコペコお辭儀をして無邪氣な笑を浮べた。

「あゝ美しい入日だ！」親鸞は、路に出て來ると、今一度夕空を仰いで溜息をついた。惣五郎は念佛をとなへて居た。

「よかつた！ よく實みつた！ 誠に有りがたい！」もう一度親鸞は眼前に擴がつた稻田を眺めて居た。惣五郎は路ばたの一株が倒れかけて居るのを見ると、小さな杭を立て、藁屑でしば

つて、眞直に直してやり、一本折れた莖を、さも勞はるやうに撫で、枯れないやうにと、ゆがいてゐた。

「なあ、惣五郎、お前の眼にはそろ／＼浄土の美しさが見えて來たのね！」といふと、惣五郎は、合掌して入日を拜んでゐた。

「おゝ、よし／＼！その稻一本も報土の上に實を結ぶんだよ！」と親鸞はいふて、丘の方へ進ると、小屋のかけから、四つか五つかになる男の兒が、チヨコ／＼と走り出て來て、

「お父ちゃん！」と叫びながら、双手をあげて惣五郎に飛びつかうとする。

「おゝおゝ！」親鸞は、愉快さうに叫んで、子供を抱きあげ、その頭をなで、やると、惣五郎は、さも幸福さうに身體の置場もないかの如く、キヨロ／＼してゐた。子供は、親鸞よりも城主よりも、盜棒上りの父親がよいと見えて、親鸞の腕から飛び出すと、父親の兩脚りやうあしにまつた。

「おいおい！ 桃太郎！ 親鸞様と城主様にお辭儀をしないか？」父親から斯ういはれると子供は父の裾をはぐつて隠れた。

「アハハ」親鸞も城主も聲を合せて笑つた。

親鸞が稻田の家に戻つて、幾日にもならない内、城主春行が突然「今日は私の誕生日ですから」とて、訪ねて來た。

書齋に案内すると、春行は挨拶が終るが早いか、驚くべき決心を告白した。

「私は父在世の頃から、あなたの弟子にしていたゞいて、修行をさしていたゞきたいと存じて居ました。幾度か父にその事を申しましたけれども、突然父が逝去しましたもので、城を嗣ぐ事になりましたが、私はどうしても斯うしてをれないのです。とう／＼決心しまして、城は弟の國綱くにたけに譲ることに致し、家老にもその事を告げて、只今こゝにお訪ねいたしました」春行は斯ういふのであつた。

「それはいけない！」とて節角の決心を親鸞は止させやうと試みた。「そなたは徳高い父上の遺志を嗣いで、城下に徳政を布かれる天命があるのぢやありませんか？ その天命に生きることは大切なことぢやが……。下に良民があつても、上に悪政を執る者があればいけないの

だが……善き働き手は、善き指揮者を仲がねばならぬ。どうか、私の弟子になることだけは思ひとまつていたゞきたいのだが」

「だつて、若し私が、城主の家に産れないで、貧乏な凡下の家に産れたのでしたら、どうでせう。あなたの弟子にしていたゞくといふことは、またとない幸福ぢやありませんか？ 私 が城主の家に産れたといふことは、宿命でせう。けれども宿命に縛られた人間は罪人だと承つて居ます。私は罪の采配さいはいを握つて、人民を指揮することには忍びないのです！」

「あゝ、それは素破らしいお考へです。然しな、もつと考へて下され。商人の家に生れた者が商賣をする。農家に産れた者が農業をする……そこには、長い間練られ養はれたものがあつて、商人が百姓になり、百姓が商人となるよりは、餘程自然ぢやないのですかな！」

「ですけれど、只それだけの理由は、究竟の理由ぢやありません。王位をすてゝも、凡下の生活をすべき招喚の聲を聞いたなら、御聲に従ふより外に救ひはありませんから！」

「さうだ！ 然し、あなたはまだ十七の少年ぢや。私には、そなたの決心がどれ程深いか、その理由が那邊に在るのか解らないのだ。どうだ！ もう一年靜かに考へて貰へまいか？ 人

が決心するには、第一本願に聞き、第二に先輩に問ひ、第三に自分で考へる事が必要だ。が最後には、どうしても本願に従はねばならなくなる。一度は決心しても、時が経てば、また疑惑が起るものだし、また斷然決行しても、年月の経つにつれ、思はざる後悔に出でないとも限らないものでな。どうしなければならぬといふ一定の道は添そたへられては居らんものでな。だから決心は何時でも新たにしなければならぬ。一度決心して、そこに絶對不變の報土が現はれるといふのならば、何も人は問題なしで済むものだ。けれども 出家をしても、念佛物うく、迷ひの心が起り、眞實の念に乏しくなり、不安は次から次へと起つて、何が何だか分らなくなるものです。罪業に深い吾等凡夫は 疑ひをつくるより外にないものです。凡て偉大な行ひや事業といふものは 人間がするのではないのでな。不朽なものは、みんな如來の御誓ひです。自分の計らひで、絶對の報土が現はれ、迷ひの雲が拂はれると思ふのは、それこそ迷ひです。彌陀の御誓ひは拔ぐことの出来ない力なれど、人の決心には不純な迷ひがくつつくものでな。でね故の法然上人も、淨土宗は愚者になりて往生すと申されましたが、なか／＼にいはいはれあることで御座います。斯うしたならば、よからうと思ふて決心するのは賢者の決心であつて、愚者の

往生ぢやないのです。賢者は、その決心で、自分の小さな報ひを自分で造つて誇りますが、愚者の往生といふは、攝取不捨の力に生かされ、不退の願力に呼び醒されることです。愚者は、その誇らしげな計らひを持たず、たゞ、さうならなければならぬ力に迫られて、心の奥の微かな聲のためには身をも捨てます。人には何をしてをらねばならぬといふ絶対的の理由はないのです。たゞ、凡てを棄て、も斯うならなければならぬといふ正覺の閃めきに觸れて育てられるのです。眞實な人には、計らひがありません……また結果の豫定もありません。眞實な人は皆愚者です。眞實な人は、皆直入的です。だから、その動かされる力は絶対的です。法藏比丘の正覺……あれが、愚者の絶対祈願です。愚者でなくちや、あの正覺を得ません。然しな財産を棄て、地上の權威を棄て、も、その人が必ずしも正覺にうたれてをるといふことはいへないのです。その人の心に、結果の豫想に惑はされるものがあつたら、それは海の中に財産を棄て、無益な目的のため、わざと荆棘いばらの上を踏んで行くやうなものです。悲願にうたれた心といふものは、怖ろしいものです。愚者でなくちや、それに堪えませぬ。それは價値の絶対轉換です。賢い人は、價値の轉換に堪えられないで、また

た俗に戻ります。戻らなくとも偽善者になります！ どうです？ 愚者になれますか、愚者に……」

親鸞が斯ういつても、春時は決心をいがへさなかつた。

「あゝ、それは立派だ！ 私は心が動かされる。けれどもな、私を師匠にしちやいけない。凡ての人は敬まはれなくちやならんが、何から何まで崇拜されては、崇拜する人のためいけないのだ」。親鸞は再び斯ういつて、春行の決心を喜んでやつた。

然し、春行の決心を受容れたに就ても、親鸞は自分の責任の浩大な惱みに苦しめられた。親鸞はもつと深く何ものかに觸れようとする本能の飢渴を感じてならなかつた。さうだ……更に大なるもの、驚くべきものが彼を待つて居た。親鸞の心には痛いほど人類の渴望が意識されて居たのだ。

創作親鸞（第二部）終

大正十一年八月廿五日印刷
大正十一年七月廿八日發行

創作親鸞 第二部
定價金貳圓八拾錢

著作者 三浦 關 造

發行者 鈴木 芑
東京市神田區表猿樂町二番地

印刷者 大杉直次郎
東京市麴町區飯田町一ノ六



發行所

東京文社

東京市神田區表猿樂町二番地

電話神田二九四四番
振替東京八二二六番

著者が畢世の努力の大結晶

野村隈畔氏著 (堂々五百頁の一大力作)

現代の哲學及哲學者

四六版總クロース装
紙數 五百餘頁
定價 金貳圓八拾錢
送料(書留)金拾八錢

學界の渴望
久しかりし現代
の鳥瞰圖

哲學研究の徒の久しく渴望して居たのは、現今我國に於て如何なる哲學思想が如何なる哲學者によつて主張されつゝあるかを、系統的に闡明し且つ論評せるの書である。斯くの如き現代哲學思潮の鳥瞰圖とも云ふべきものは、如何なる學究者も須らく一本を備ふるの必要がある。今や學者の良心熾烈なる著者によつて本書の完成を見、現代の代表的哲學者を拉し來つて各學派に分類し、其諸學説を闡明し且つ透徹せる批判を加へたものであつて、論理整然行文亦平明、實に近來に於ける我が哲學思想界の一大收穫である。苟も現代の哲學思潮を理解し、其の歸趨を知らんとするの士は必讀を要する。

本書の目次

生命派の哲學 生命派哲學の特色 生命の問題 心身無差別論 生命學 生命派哲學の眞相 透視と念寫 價値派の哲學 價値派哲學の特色 序論 人生の根本 先見的ロマンチック功利主義 序論 人生の根本 先見的自我主義と主觀主義と經驗論 主觀主義と主觀主義と經濟哲學

學の問題 序論 經濟學の對象 經濟哲學の必要 極概念の哲學 體驗派の哲學 體驗派哲學の特色 序論 純粹經驗の意義 眞實在 體驗派哲學の特色 文化への意志 純粹心理學 眞實在 體驗派哲學の特色 關係の意識 純粹心理學 眞實在 體驗派哲學の特色 論争 序論 文化主義の起原 (以下數十項)

——心血を凝らして成れる著者の學究的傑作——

野村隈畔氏著 千載不朽の名著！

自我の研究

四六版總クローヌ製
紙數三百四十餘頁
定價金貳圓參拾錢
送料(書留)金拾八錢

現代哲學界の最高權威

希臘哲學の昔より自我の存在は疑ふべからざるもので儼然たる獨立の存在である。茲に吾人は人生哲學の最も重要な問題として、吾人の哲學的規定は何か、第一義的の根本問題に逢着する。隈畔氏は罕なる篤學獨學を許さないのである。貧乏の爲めに妻子を其の郷里に還し、一の參考書をも手にせずして、内面的體驗の生命の拘束されず、著者の獨創的な研究として尊重される。得たるものから生命の規約に生きんとする者の讀まざる可らざるものであべく、荷も自分の生命に生きんとする者の讀まざる可らざるものである。(國民新聞評)

嗚呼この書成る。吾祇むで是れを父母に捧げむと欲す。されど父母これを解せざるを如何にせん。吾是を恩師に奉らむと欲す。されど吾に恩師なきを如何せん。吾これを現代に贈らむと欲す。されど現代はこれを享けざらむことを懼る。吾唯これ生命か最も孤獨なる吾は限りなく爾生命を愛す。(著者)

野村隈畔氏著 『自我の研究』の姉妹編

自我を超えて

四六版總クローヌ製
紙數三百餘頁
定價金貳圓參拾錢
送料金拾八錢

「自我を超えて」一篇は、予の最近に於ける精神生活の必然的な轉換を叙したもので、謂はば予の精神歴史である。若し予の「形而上的要求」が哲學構成の作業を始むるとすれば、その材料は正にこの精神歴史である。しかし哲學的認識の根本對象たる普遍的な絶対價値は、生きた現實の生活において直接に體驗せらるゝものであるから、予の實際に經驗したこの精神歴史は、その意味において哲學的意義を有するものであるといふことが出来るやう。

予は先きに、自我の發展完成をもつて生活の倫理的な根本基調を形成するものと思惟し、自我の哲學的認識と精熱的體驗的な自我の把握とに努力した。然るに予の精神生活の必然的轉換は、自我の發展完成の理想は、更に自我を超えて、内部における自律的肯定の努力のみによりて達すること、言ひ換へれば、更に自我を超えて、自我以上の絶対的存在を捉へることによりてのみ、初めて達し得らるゝものである。即ち所謂信仰生活なるものは自我の完成を理想とする倫理的な生活に於ても必然的に認容せなければならぬと認められた。故に「自我を超えて」一篇は予が現在の倫理的な生活より宗教的生活に移入する橋梁を爲すものである。而してこの轉換移入は、生活において又哲學に於ても、極めて重要な一般意義を有するものである。(著者)

思ふから、敢て本書を公にして「自我の研究」の讀者に提供する所以である。(著者)

金子白夢氏著

詩と宗教との交響樂

光に養はれて

總ポプリン装、箱入
四六版二百八十餘頁
定價壹圓八拾錢
送料(書留)金拾八錢

著者第二の新著たる此書は血に依て體驗附けられた著者の生活記録である。魂と魂とが溶け合せて永遠の生命が呼吸して居る。現代文明に對する獨斷の批判、經濟より宗教への道、新文明の曙光と深思の心證とが渾じて一つに響いて居る。著者卅年の精神生活の結晶が暗示と豫言から泉んで居る。全人類愛の燃ゆる様な信念が現代人の生活を深め精神を淨化する力に満ちて居る。詩と音樂と宗教とが眞生活の中に匂ふて居る。至深信樂の敬虔味が全編を潤ふして居る。

第一編(前六)の下にて——生 活の破壊と建築と・思想の生活 悲みに生くる生活(一)愛の生活(二) 活(三)私の讀 活(四)神祕の生活(五)思 活(六)土に親む生活 (七)深生の生活(八)心證の生 活(九)思索の生活(十)歡喜の 活(十一)古典生活(十二)深 い戦ひの生活(十三)夢見る生 活(十四)儂術詩人の生活(十 五)私の思想生活(十六)象徴の 生活(十七)聖なる闇の生活(十 八)「私」に徹した生活(二十)哲 人の生活・第三編現實の彼岸よ り——創造の歡喜・生命の豊か さ・詩と宗教と・心證語・一步一 躍・斷想語・カーペンターの藝 術思想・タゴールの自然觀と其 の詩。

次目『てれは養に光』

活の破壊と建築と・思想の生活 悲みに生くる生活(一)愛の生活(二) 活(三)私の讀 活(四)神祕の生活(五)思 活(六)土に親む生活 (七)深生の生活(八)心證の生 活(九)思索の生活(十)歡喜の 活(十一)古典生活(十二)深 い戦ひの生活(十三)夢見る生 活(十四)儂術詩人の生活(十 五)私の思想生活(十六)象徴の 生活(十七)聖なる闇の生活(十 八)「私」に徹した生活(二十)哲 人の生活・第三編現實の彼岸よ り——創造の歡喜・生命の豊か さ・詩と宗教と・心證語・一步一 躍・斷想語・カーペンターの藝 術思想・タゴールの自然觀と其 の詩。

金子白夢氏著

「體驗の宗教」の姉妹編出づ!

體驗の歩み

總ポプリン装、箱入
四六版三百餘頁
定價金貳圓參拾錢
送料(書留)金拾八錢

著者は現代の宗教界に於て東洋意識と西洋思想とを徹底的に融合して、聖の 一線に立つて生活即宗教、宗教即生活の心境を來るべき時代に於て實現せんと 期して居るものである。今、此の見地に目覺めて新らしい「體驗の歩み」を試 みたものが即ち彼の此の著である。

彼は此の著に於て生活に即して科學を批評し、生活と藝術との生きたる關係 を明かにし、深刻なる現實味を痛感し、體驗の宗教に入つて魂の窓より靈界の 光景を凝視し、更に轉じて神祕の境地に美の姿を瀾み、タゴールの音樂思想に 入り、メテレルリングの靈魂哲學の跡を追ひ、スノーードンの形而上學に接觸し、 オイケンの信仰を叩き、道元の宗教を探り、テニソンの詩を味ひ、最後に將に 來らんとする新文明に於ける新宗教の姿を明にして、東洋意識のために一新啓 示をなすところ、著者獨特の見地を見るべく、詩的豊富さと宗教的敬虔味との 溶け合つた一種の散文詩とも云ふべき論文集である。

イブセン原著 金子白夢氏譯 宗教的色彩に富める不朽の傑作

建築師ソルネス

絹表装 箱入
四六版二百四十頁
定價壹圓八拾錢
送料(書留)金十八錢

深刻なる社會劇より徹底せる神祕劇に轉じた第三期のイブセンの『建築師ソルネス』は、數ある彼の著作中の最も深みのある作である。此の作は彼が單なる戀愛喜劇の描寫や社會改造の問題劇に物足らずして更に現實の深みに徹して神祕的象徴的な世界に沈潜し透入してそこに現實の奥に流れつゝある新らしい光に觸れて『或物』を掴み出し、其の掴み得たるものを暗示的な表現の姿で投げ出したものが此の作である。此の作は彼の全著作中最高の名作たるのみならず、恐らくは近代文藝中の最大傑作と云つても過言ではあるまい。新神祕主義が時代の新思潮と化つて來た今日此譯の出づる偶然ではない。譯者はイブセンの熱愛者、就中『建築師ソルネス』は譯者の藝術上の戀人である。此の作はシールド・イブセンによつて獨譯されたものを底本として譯されたもので、原作其の物の嚴密さと神祕さとが如實に寫されて居る。此の點に於て他の譯と全く其の選を異にして居る。

□ 東京高等學校長 湯原元一氏著 □

(高評責々)

思想問題の側面觀

四六版總クローヌ装
紙數二百五拾頁
定價壹圓九拾錢
送料(書留)金拾八錢

新思想に富める經世的大教育家として名聲ある著者は、萎靡沈滞せる我教育界中稀に見る潑刺たる活動振りを發揮し、常に新經策を提唱して止まざるなり。本書は、現今我が思想界に於ける幾多の緊急問題に對して徹底せる批判を加へ其歸趨を闡明せるものにして、殊に一般教育者及び青年子女教養の任にある人士の爲に、教育對文藝の争闘に關する一大抱負を披瀝せるもの也。近時、文藝の急激なる勃興につれて、青年子女の小説耽讀の傾向は驚くべき勢を以てし其結果、學校教育を害ひ家庭教育を亂しつゝあるは識者の齊しく認むる處、この恐るべき大問題に對して、當事者は如何なる覺悟と如何なる處置に出づべきかを闡明して餘蘊なからしめたるは本書也。苟も一學校は一本を備ふべく、職を教育に置くの士又一本を備ふべく、子弟教養の任にあるの士又然り。實に本書は教育者の爲めの教育者也。

□文學士小林愛雄氏著□

(歡迎熾烈)

學校
家庭

餘興劇脚本集

大判、上製、頗美本
寫真、樂譜入
定價二圓八拾錢
送料(書留)金拾八錢

本書は、小學校・女學校・補習學校の校友會・記念會或は少年會・青年會・處女會及各工場等のいろ／＼な會に餘興として實演するに適當な教育劇唱歌劇を集め、そして、それをすぐ試演する事が出来る様に樂譜も入れ且つ説明を加へたものである。

脚本は、著者の創作と歐米の名作翻譯とを合せて十五種。何れも、誰に見せても誰が演じてても立派な、而も興味深き名作ばかりである。

本書の如きは既に社會の各方面から非常に渴望されて居たものである。今や比渴望は本書の刊行によつてすかり醫された。

□金子白夢氏著□

神祕の宗教

總ポプリン裝箱入
四六版三百九十餘頁
定價貳圓六拾錢
送料(書留)拾八錢

これ最も深奥なる宗教的實參の境地に入れる著者の第三著作也。思索より體驗への道を辿り、現實生活の唯中に立ちて神祕の生活を體し、詩の國より信の國に生きつゝある、著者最近の内面生活史也。煩悶と懊惱との戰を経て、端的に神の胸より感應の聲を聽き得たる魂の記録也。時代の精神が宗教的經驗に向つて白熱化し來れる新時代の要求に應ふる現代の約翰傳也。

文學士寺田精一氏著

現代人の生活

四六版總クローヌ
紙數 四百餘頁
定價二圓八拾錢
送料金(書留)拾八錢

- ◇現代人の不安
人類の不安・覺醒と不満・顯著な變遷・現代人の日常・弱められた傳統・不安の感興・不安よりの脱却
- ◇現代人と山海の思慕
他郷の寛き・境遇の變化・征服の満足・自然の憧憬・有機的快感・神祕の迎合・刺激の要求
- ◇文化に伴ふ人類の苦悶
自知のるびと悲しみ・慾望からの苦悶・官能からの苦悶・編異からの苦悶・繁殖からの苦悶・競争からの苦悶・發明からの苦悶・體質からの苦悶・生存からの苦悶・道徳からの苦悶
- ◇現代の生活と迷信
文明と迷信・思想の簡素・科學の過信・運命の不解・生活の脅威・保健の要求・現代と保健醫學の過信・絶對的の力・迷信遍歴者・現代と迷信
- ◇酒の功德
酒の觀察者・酒客の言ひ分・陶酔的刺戟・反省と苦惱・現代の人々・官能の享樂・禁酒令の跡・偏異的要求
- ◇餘裕と娛樂
仕事と娛樂・餘裕と娛樂化・娛樂と實利・娛樂の主觀性・繁忙と娛樂
- ◇彌次の要求と満足
局外的の振舞・優越慾の不満・尊厳力の解放・反抗慾の満足・對強者的満足・調子外れなこと・支配慾の満足・自己反應の喜び・虛榮心の満足・群集心理から彌次の技功化・彌次滑稽化・彌次の餘興化
- ◇弱者の強みと慰め
現代人の一時徴・強者と弱者・弱者と覺醒力の刺戟・強者の脅され
- ◇愛の生活と意地悪根性
我儘の満足・情味の豊富・不安の感
- ◇選舉競争
興・争闘の享樂・獲得の寂寞
理想選舉・最負・候補者の弱み・努力の誇示・自家廣告・假裝的尊敬・稚氣の満々・選舉の興味・熱狂と無謀・民衆の覺醒
- ◇人種争闘
第一印象・言語・風俗・宗教・傳統・異類の疎遠・利害の關係
- ◇お祭騒ぎの心理
精力の放散・餘裕の享樂・民族的特性・鎮守のお祭・現代の生活・氣晴・官能の満足・お祭騒ぎの制限
- ◇若さ女性の淋しき心
心身の不調・現代の女性・覺醒の女性・享樂の深み・焦燥からの苦惱・淋しきの開展・藝術に宗教に
- ◇服従と反抗
感激(其他數十項)

506
178

終